

# 公民科におけるパフォーマンス評価を取り入れた実践研究

## -現代社会『現代に生きる青年』の実践を通して-

教職実践専攻・教育実践開発コース

学籍番号 17GP509 氏名 八柳 匡

### 1 はじめに

平成28年12月に示された中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」は「広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力」を育成することが必要であるとしている<sup>i</sup>。これに関連して、社会科・公民科では主権者教育が近年求められており、「主権者教育の推進に関する検討チーム 最終まとめ」は、「単に政治の仕組みについて必要な知識を習得させるにとどまらず、主権者として社会の中で自立し、他者と連携・協働しながら、社会を生き抜く力や地域の課題解決を社会の構成員の一人として主体的に担うことができる力を身に付けさせる」ことを目的としている<sup>ii</sup>。

これを実現するための授業方法に、現在行われている教育実践や先行研究から考えると、効果のある学習方法として本研究で取り上げるパフォーマンス評価を取り入れた実践がある。西岡加奈恵は、リアルな文脈において、知識やスキルを総合して使いこなすことを求めるような学習課題を用いた評価をパフォーマンス評価と呼び、複数の単元において繰り返し与えることを提案している<sup>iii</sup>。これは学習課題を多面的・多角的に考えることができる点で有効である。この実践は、小・中学校における実践例に比べ、高校では実践例が限られているが、その原因として大学入試やカリキュラムとの兼ね合いで授業時間が制約されていることが挙げられている。

以上のことから、本研究では、公民科における深い学びを実現するためにはどのような取り組みが可能かという観点から、公民科においてパフォーマンス評価を取り入れた実践を行い、主権者教育の先行実践研究に学び、考察する。

### 2 研究の経過

#### (1) 公民科の先行実践例の検討

総務省と文部科学省は、高校生に必要な国家・社会の形成者として求められる力として、①論理的思考力、②現実社会の諸課題について多面的・多角的に考察し、公正に判断する力、③現実社会の諸課題を見出し、協働的に追求し解決する力、④公共的な事柄に自ら参画しようとする意欲や態度の4つの力をあげている<sup>iv</sup>。

福田秀志はこれらの力を培うために年間通して時事問題を事例に取り上げ、そのテーマを話し合うということを意識的に実践している。生徒からの感想として「今までこういった国のことや政治のことを考えたことはなかったし、授業でも取り扱うことがなかったので、考える機会があつて良かったと思う」などの声が上がっており、「国際社会の平和・安全のために自衛隊の活用を強化すべきかどうか」というテーマの討論会を行った。この実践のポイントは、事前の学習と本番の討論会での議論

を踏まえて、その討論会終了後と中間考査の2回にわたってテーマに対する自分の意見を文章化しまとめる作業を行った点である<sup>v</sup>。これによる効果としては、生徒一人一人が持つ意見が、他者と議論することでどのように変容したのかが分かりやすいこと、討論会の勝敗がすべてではなくあくまで現状の理解のためのプロセスになっており、議論が一過性のものではなく生徒の学びの中でより深まるポイントとして機能しているということであった。

このように、授業や定期考査というプロセスで学習を進め知識を増やしていくことに加えて、その知識を活用し話し合いやレポート作成を行うことで生徒がより深い学びを実感できるのではないかと、ということが考えられる。

## (2) パフォーマンス評価についての実践研究

田中耕治は、指導要録における授業評価が「集団に準拠した評価」（相対評価）から「目標に準拠した評価」（絶対評価）に変化したこと、PISA 調査の結果によって「確かな学力」観に転換したことを確認し、その上で学力の「習得」としての「知識・理解」「技能」と「活用」としての「思考・判断・表現」を評価する方法としてパフォーマンス評価が有効であると主張した。また基準作りとしてルーブリックが注目されていると指摘している。ルーブリックとは評定尺度とその内容を記述する指標（そして、具体的なサンプル）であり、これは指導と学習にとって具体的な到達点の確認と次のステップへの指針になるものである<sup>vi</sup>。

パフォーマンス評価は高校生を対象に実践している例が少ない。そのため、これまで見てきた公民科の実践例などを参考に、実践が可能なパフォーマンス評価・ルーブリックの授業を構想し、実践した。

## 3 実践の概要

### (1) 単元の構成

①教材名 第一学習社『高等学校 改訂版 現代社会』

②単元名 「第2編第1章 現代に生きる青年」

③単元の目標

- ・ 青年期にある生徒の心理的・社会的特性や青年期に達成すべき発達課題を理解する。
- ・ 高校生の今何をすべきかを、パフォーマンス評価に取り組むことで、自己の生活や将来を主観的、客観的に振り返り、具体的な手立てを考えることができる。

④学習課題 「30歳になった自分のために、高校時代にやっておくべきこと」を考える

⑤単元のパフォーマンス課題

高1の新入生向けに、「30歳になった自分のために、高校時代にやっておくべきこと」を先輩である皆さんからアドバイスをすることになりました。

高2の今までの経験と、『現代に生きる青年』での学習を生かして、今の時期に何をすべきかレポートにまとめましょう。

⑥評価基準（ルーブリック）

A	高校生である今の時期に何をすべきか、自己の体験と将来的な展望を把握し具体的な例が挙げられている。 また、青年期の特徴や社会参画の際の注意点等複数の要素に触れながら根拠づけられている。
B	高校生である今の時期に何をすべきか、自己の体験と将来的な展望を把握し具体的な例が挙げられている。 また、青年期の特徴や社会参画の際の注意点等のいずれかに触れながら根拠づけられている。
C	高校生である今の時期に何をすべきか、という問いに対する主張に具体例がない。

⑦単元の指導計画

時	題材名	学習内容	ねらい
1	青年期の意義と自己形成の課題（1）	・青年期の心理的傾向 ・自我同一性の確立	・青年期の特性を理解し、自分の性格や生活を振り返る。
		学習課題「30歳になった自分のために高校時代にやっておくべきこと」を考える。	
2	青年期の意義と自己形成の課題（2）	・青年期の発達課題	・アイデンティティの確立に向けた具体的な取り組みを考える。
3	現代社会における青年の生き方	・職業生活・社会参加の必要性 ・生涯教育，キャリアデザイン	・働くことで何をすることができるのかを考える。
4	伝統や文化と私たちの生活	・伝統や文化	・日常生活と日本の伝統との関わりについてわかる。
		・最終レポートの作成	・青年期以後，活躍するために今何をすべきか考えることができる。
	評価基準：高校生である今の時期に何をすべきか、自己の体験と将来的な展望を把握し具体的な例が挙げられている。		

本単元では、生涯における青年期の意義を学習し、自己のこれまでの生活の様子などを客観的に振り返る調査やワークを行うことで、自分の性格の傾向や自分が現在抱えている課題の分析を行うことが主な学習内容である。

そこで、本単元での学習で得た発見や課題意識を踏まえ、自らの高校生活をより良いものにしていく具体的な手立てを考えることを目指し、パフォーマンス課題を提示した。

より客観的かつ具体的な手立てを検討するため単元の最後にパフォーマンス課題に基づくレポートを課した。評価では、作成したレポートを教員だけではなく、生徒が自己評価・相互評価できるようにするため、生徒にも課題の評価基準（ルーブリック）を提示した。

## ⑧生徒の実態


2年生の現代社会の授業では生徒が新聞記事の一つを選び、その内容と意見を発表するという活動を行っている。これにより新聞記事や資料を読んで内容を理解する力、そして講演や講話などをレポートにまとめる能力が非常に高いように感じた。

一方、英語や数学など各科目で単語テストや課題提出を求められることが多く、休み時間などに様子を見に行くと何かしらの勉強をしている生徒が目につき、生徒の読む・書くといった能力と知識の活用や学びを深める学習に努力をしている様子を見受ける事ができた。





## (2) 授業の経過

## ① 青年期の意義と自己形成の課題 (実施日 2018年5月18日)

導入		<ul style="list-style-type: none"> <li>・(1枚目) 2年生の現代社会の授業では生徒が新聞記事の一つを選び、内容の要約と意見を発表するという活動を毎時間行っている。教員は生徒の発表に対しさらに考えが深められるよう解説や補足を行う。</li> <li>・(2枚目) 生徒の年齢がライフサイクルの中で「青年期」に当たることを確認し、心理的な傾向を勉強することでこの時期にすべきことを考える、というパフォーマンス課題とループリックを伝える。</li> </ul>
展開1		<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分は今、子供と大人どちらであると思うか問いかける。</li> <li>黒板に両端が「子供」と「大人」になった数直線を板書し、生徒は自分の意見に近いところに付箋を貼る。</li> <li>(振り返り)</li> <li>・全体で意見を共有する方法として、より視覚的に他の人との意見の違いを確認できた。</li> <li>・他の生徒の発言を書くスペースをワークシートに用意することでより印象付けることができた。</li> </ul>
展開2		<ul style="list-style-type: none"> <li>・青年期の発達課題として「アイデンティティの確立」が挙げられていることを確認する。</li> <li>・現在どれだけアイデンティティが確立しているか簡易的な検査を行い、結果について検討する。</li> <li>(振り返り)</li> <li>・「質問で聞かれている内容に心当たりはあるか」と問いかけることで、意見がまとまった生徒が多かった。</li> </ul>


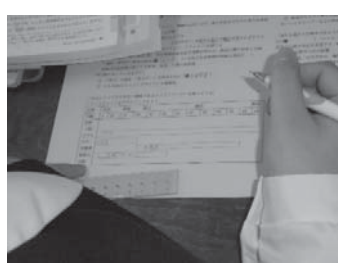
<p>ま と め</p>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークの設問を基に、自分の生活やこれまでの経験を振り返りワークシートに書く。</li> <li>(解答例1) 自分の自信が持てる部分・やりたいことが無い</li> <li>(解答例2) 周りからみた自分は誤解されているのではないか</li> </ul>
----------------------	---	--

②青年期の意義と自己形成の課題 (実施日 2018年5月22日)


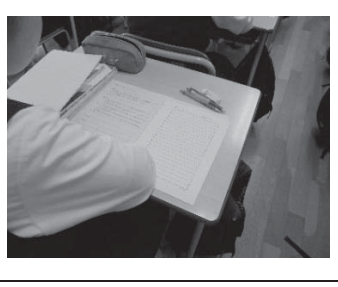

<p>導 入</p>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒が前時に書いた考察・感想をまとめたプリントを読み、自分以外の生徒も、何かしらの不安などを抱えていることを伝える。</li> <li>(振り返り)</li> <li>・この作業を行うことで、自分の意見を客観的に振り返ることができた。</li> <li>・本時の最後に行う課題のための振り返りにもなった。</li> </ul>
<p>展 開 1</p>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・青年期における心の変化として性のめざめと自我のめざめがあるということを伝える。</li> <li>・多くの青年は、表面的には何事もなく大人になる傾向があり、その際、心の奥に悩みを抱える傾向にあることを伝える。</li> </ul>
<p>展 開 2</p>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・自己形成の目標に「豊かな個性 (パーソナリティ)」の形成があることを伝える。また、その個性が「能力、気質、性格」と3つの要素に分かれていることを伝える。</li> <li>・個性化と社会化を両立させることで自己形成が実現できることを確認する。</li> </ul>
<p>ま と め</p>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・前時に書いた自分が抱えている悩み・課題に対し、どうしていけばいいのか具体的な手立てをペアで話し合いながら検討する。</li> <li>(振り返り)</li> <li>・単元の課題としては「後輩へアドバイスをする」ことを求めていたため、他者の悩みを聞き、手立てを考える活動を意識的に行うとより効果的になるだろうと感じた。</li> </ul>



## ③現代社会における青年の生き方（実施日 2018年5月24日）

導入		<ul style="list-style-type: none"> <li>・前時に話し合った、悩みや課題への具体的な手立てについてまとめたプリントを、自らの悩みと照らし合わせながら読む。</li> <li>・「働くことで何が得られるのか」を考える。経済的自立，社会参加，社会貢献ができることが、喜び，満足感，生きがいにつながる，ということを伝える。</li> </ul>
展開 1 ・ 2		<ul style="list-style-type: none"> <li>・現代社会における「生涯学習」の必要性に触れ、「生きがい」との関連性について伝える。</li> <li>・自分にとって譲れない価値であるキャリアアンカーを確認する。</li> <li>・高校卒業後から65歳の定年までのライフキャリアをデザインする。</li> </ul>

## ④伝統や文化と私たちの生活（実施日 2018年5月29日）

導入		<ul style="list-style-type: none"> <li>・通過儀礼（イニシエーション）について、前時までに「社会的地位の変化」という役割が変わってきたという点について触れる。</li> <li>・祭りの年中行事として、さくらまつり・ねふたまつりなどを挙げ、行事や祝日の意味や由来を知り伝統文化と若者文化の関係を伝える。</li> </ul>
展開		<ul style="list-style-type: none"> <li>・まとめのレポート作成（振り返り）</li> <li>・レポートの本筋は「高校時代に何をすべきか」ということであるが、これについては1・2時間目の中で課題として考えたことを活用できる上、レポート作成用に大まかなガイドラインを用意したため、すぐにレポートを書き始めている生徒が多かった。</li> </ul>
まとめ		<ul style="list-style-type: none"> <li>・レポートを自己評価し、その後グループ内で回し読みし相互評価をする。</li> <li>・評価基準：高校生である今の時期に何をすべきか、自己の体験と将来的な展望を把握し具体的な例が挙げられている。（振り返り）</li> <li>・ループリックでは主張に対して多方面から根拠付けできているかどうかを評価のポイントとしていたが、「後輩へのアドバイス」というパフォーマンス課題の設定をより徹底するためには小論文のような文体から離れて直接語り掛けるような文体で書くことがより望ましかったように感じた。</li> </ul>

### (3) 授業の総括

今回の授業実践においては、生徒が身に付けている自分の意見を文章に書いたり人に話したりする能力を授業内でも活用することで、授業で学習した内容をより深め、日常生活に学んだことが活かせるようになると考え、パフォーマンス課題に基づいた課題設定と授業構成を意識した。

パフォーマンス課題のレポート作成を念頭に置き、青年期の心理的特徴に触れた1～2時間目には課題を明確化するため、自らの心情やこれまでの生活面を振り返る活動を行った。3～4時間目で若者の社会的な役割について触れ、将来を見据えた高校生活の計画を立てるために適職診断や高校卒業後のキャリアデザインを行った。

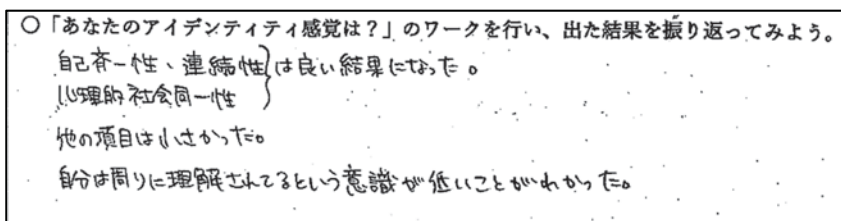
毎時間行っている新聞記事を使った活動は、生徒にとって基礎的な能力の向上につながる活動であり、同時に現代社会の授業内容と自らの社会への問題意識を結び付けるきっかけにもなっている。このことが現代社会への学習意欲を高める要因の一つになっているように思う。また、教員が応答するところも活動の一部となっているため、私自身にとっても幅広い分野の時事問題について調べた上で授業に臨むことで、教材準備や授業を進める上での資質の向上にも繋がった。

## 4 実践の分析

### (1) 生徒のワークシート及びレポートについて

生徒Aのワークシートとレポートを参考にして、授業を分析する。

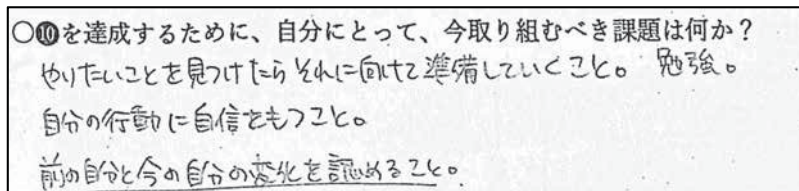
1時間目には青年期の発達課題として「アイデンティティの確立」が挙げられていることを確認した上で現在どれだけアイデンティティが確立しているか簡易的な検査を行い、結果について検討した。この生徒は「自分は周りに理解され



(図1) 1時間目のワークシート

ているという意識が低い」と記述している。ほかの項目にある「自己一性・連続性」は良い結果になったという点から、自分の中で将来的に取り組みたいことや適性ははっきり認識しているが、それが周りから見た自分の評価とずれており、その結果自信が強く持てていない、ということが考えられる(図1)。

2時間目には「前時に書いた自分が抱えている悩み・課題に対し、どうしていけばいいのか」具体的な手立てをペアで話し合いながら検討した。



(図2) 2時間目のワークシート

この生徒は、「アイデンティティの確立のために何をすべきか」という問いについて、「やりたいことについて見つけたらそれに向けて準備する」「自分の行動に自信を持つ」「自分の変化を認める」ことを記述している(図2)。後述するレポート課題にもあるように、このことは自分の経験からアドバイスできることの中心的内容

であることがわかる。また、前時に判明した「周りに理解されているという意識が低い」という部分に対しては自分の課題解決のために、周囲に理解してもらうために自信を持つことや伝える活動のための準備ととらえることができる。

また、3時間目の適職診断やキャリアデザインにおいては「看護師になる」ことを中心に考えていた。

最終的なレポートについては、「いろいろなことにチャレンジしていくことが必要」という意見を書き、その根拠として2時間目のワークに書いた「やりたいことについて見つけたらそれに向けて準備する」とことと3時間目に学習したキャリアデザインの観点から、興味のあることについて学習を深めることが、明確な目標をもって将来の職業選択を行うためにも繋がるためであるとしている。

また、「自分の行動に自信を持つ」「自分の変化を認める」という点は、青年期の発達課題である「アイデンティティの確立」に繋がる内容であることも述べている。

学習の成果として、青年期の心理的傾向と若者の社会的な立場の双方を踏まえたレポートになっており、また興味がある分野について具体的な取り組みを書くことができている(図3)。

これは一例ではあるが、他の生徒も生徒Aのように授業の展開に即してワークシートや最終レポートを記述していた。

高校生である今の時期にすべきことは、いろいろ試すことにチャレンジしていくことだと思う。
なぜならチャレンジしていくことで自分が興味のある分野を、やりたいことを見つけられしむと思う。だからである。あと、おきりにない目標を明確にできるようにするために大事なことだと思う。
将来看護師になりたいから今は看護体験や、大学とかでやっている医療に関する講演会などに行って、看護の知識を増やすべきだと思う。
行きたい大学の設備や特色を詳しく調べ、合格できるような学習計画を立てる必要があることかわかった。計画を立てるだけでなく、それを継続して実行していくことで成績が上がる、といかないので、やるべきことを明確にするのが最も大切だと思った。また、アイデンティティを確立するためには、今の自分と過去の自分の変化を認め、それを将来の自分につなげられるようにしていくことも必要であることかわかった。自分は自分という気持ちで自信をもって生活していくことで自分らしさを出ししていきたいと思う。

(図3)最終レポート

## (2) 生徒のレポートに対する自己評価、相互評価について

レポート課題についてはあらかじめ提示したルーブリックに基づくA～Cの三段階評価と感想の記述による自己評価・相互評価を行った。相互評価については、4名のグループをつくり、その中で他のメンバー3人分の評価をする活動を行った。

今回の授業実践を行った学級のうち、自己評価・相互評価を多く集計することができた学級の結果を集計し分析した。

### ① 自己評価

A	5
B	20
C	9
未記入	1

(図4)自己評価の集計結果

ルーブリックの中の評価事項として大きく2点が挙げられる。

1点目は「高校生である今の時期に何をすべきか、自己の体験と将来的な展望を把握し具体的な例が挙げられている」ことである。自己評価が高い層は「将来に向けて考えるきっかけになった。」「自分の実体験を踏まえて書くことができたからよかった。」という感想を書いていた。半面、「エピソードを入れるのが難しかった」「具体



性がない」等の理由から自己評価を低くつけた生徒もいた（図4）。

2点目は、「青年期の特徴や社会参画の際の注意点等複数の要素に触れながら根拠づけられている」ことである。これについては、授業で学習した内容を基に心理学的な側面とキャリアデザインの両面から検討しレポートを作成してもらう意図がある。この部分で、「ヤマアラシのジレンマ」や「男女雇用機会均等法」等授業で触れた事項をうまく活用し自己の分析や将来に向けた考察を深めている生徒がいたが、「青年期の特徴をどう書けばいいのかわからなかった。」「社会参画の面に触れられなかった。」という反省をし、自己評価を下げている生徒がいた。

② 相互評価

全員A	18
2人A	3
全員B	6
2人B	2
全員C	0
2人C	2
3人とも違う評価	2
未記入	2

ルーブリックの中の評価事項の1点目である、「高校生である今の時期に何をすべきか、自己の体験と将来的な展望を把握し具体的な例が挙げられている」ことについては「今すべきことが明確に描かれていたので読みやすかったです」など文章の読みやすさ、わかりやすさを重視している様子が見られた。低評価を付けた生徒のコメントにも、「書いていることはよくわからなかったが一生懸命なことは伝わった」等の肯定的な反応が多く見られた。

2点目は、「青年期の特徴や社会参画の際の注意点等複数の要素に触れながら根拠づけられている」ことについては、多くの生徒が「将来を意識できていた」と評価する一方、「社会参画について書かれているとより良いと思います」等の指摘している生徒は

(図5) 相互評価の集計結果

ごく数名に限られていた（図5）。

③ 自己評価・相互評価の関係

自己評価のほうが高評価	0
相互評価のほうが高評価	20
自己評価と相互評価が一致	12
未記入	3

今回はルーブリックを提示した上でレポートを書き、その後ルーブリックを見返して自己評価・相互評価を行った。結果として、時間等の制約から想定していた内容やルーブリックに沿った内容を書ききることができなかった際に自己評価を厳しく行っている様子がコメントに見られた。

(図6) 自己評価・相互評価の関連

一方、相互評価に「読みやすかった」「わかりやすかった」といったコメントが目立つことから、文章のわ

かりやすさを重視している様子が見られた。レポートの評価規準に「具体例が挙げられていること」を設定していることで、実体験を内容に組み込むことを意識してレポートを書いている生徒が多かったように思う。また内容について、レポートを書く前の授業で生徒個人の悩みや将来への課題、そしてそれらを改善していくための取り組みを全体に共有したり、周囲の生徒とペアやグループを作り相談したりする時間を設けたことで、レポートの内容について共通認識を持てたことも相互評価が高めに出た要因であるように思う（図6）。

### (3) 成果と課題

授業の過程で自分の意見を考え、また他者と交流する活動を多く設けた。それらの学習成果をレポートにまとめる活動を行うことにより、生徒それぞれの問題意識を反映した多様な意見が成果として確認できた。特に青年心理の内容については、授業内容を踏まえて自らの学校生活を振り返り、そのことをレポートに反映した生徒が多かった。また、ルーブリックを事前に提示することで、「具体的な取り組みの内容を書くことができているか」を自他ともに意識することができ、そのことがより良いレポートの作成に繋がったと考えられる。

一方、若者の社会的な役割については、「うまく書けなかった」という自己評価をしている生徒が多く見られた。これは後半の授業で触れた内容の中で「キャリアデザイン」の観点を取り入れた生徒が多かった一方で、男女平等や地域社会における若者の立場などの内容をうまくまとめることができなかったためである。また、この部分の過小評価が、レポートの読みやすさや意見の具体性・明確さを重視し高評価を付けた相互評価とのずれの要因になっていた。

今後は、単元の後半の授業内容をより充実させるとともに身近に感じられるような学習活動を取り入れて進めていきたい。また、ルーブリックの記述を見直し内容の評価のずれが生じないように、評価する内容の整理とより段階的な評価が行えるように検討したい。

## 5 まとめ

パフォーマンス課題を導入し、それに対応するルーブリックを提示した実践によって、より具体的な課題に直面することで生徒の活動に真剣さが増し、また自分の考えを持って他者と交流する活動によって現代社会や倫理・政治経済とで学習する内容を身近に感じることができるのではないかと考える。生徒の学習状況を評価するという本来の意図に加え、単元の学習の見通しが立ちやすいことや学習する意味付けが明確になり、学習意欲の向上に繋がるのではないかと感じた。

これからは学校での勤務が控えているが、地域や生徒の実態に合うようなパフォーマンス評価を取り入れた実践を進めていきたい。

---

### 参考文献

<sup>i</sup> 文部科学省『幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について』（2016，P132）

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902\\_0.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf) (2019/02/07 閲覧)

<sup>ii</sup> 文部科学省『「主権者教育の推進に関する検討チーム」最終まとめ～主権者として求められる力を育むために～』（2015）[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/sports/ikusei/1372381.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/ikusei/1372381.htm) (2019/02/07 閲覧)

<sup>iii</sup> 田中耕治，水原克敏，三石初雄，西岡加奈恵『新しい時代の教育課程』（有斐閣アルマ，2011，P211）

<sup>iv</sup> 総務省，文部科学省『私たちが拓く日本の未来—有権者として求められる力を身に着けるために』（2015，P30）

<sup>v</sup> 福田秀志「一八歳選挙権に向けて—生徒は国際社会の平和・安全（国際貢献）についてどう考えたのか」『一八歳選挙—主権者教育と民主主義』（全国民主主義教育研究会『民主主義教育 21 Vol.10』，2016，P128-134）

<sup>vi</sup> 田中耕治『あたらしい「評価の在り方」を拓く—「目標に準拠した評価」のこれまでとこれから』（日本標準，2012，P53-55）

【付記】 実習校の校長先生をはじめ、教科指導や学級経営について指導していただいた先生方に深く感謝申し上げます。また授業実習でお世話になったA高等学校の生徒たちにも感謝申し上げます。